
(タイトル未定)

樹南子 奈倅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（タイトル未定）

【Nコード】

N0004W

【作者名】

樹南子 奈倅

【あらすじ】

完全無計画の連載小説（笑）スーパーまったりコース！

パロディを含むラブコメです。

視点が目まぐるしいかもしれません。

プロローグ。

唐突だけど、おれは今、寝坊による遅刻の危機に瀕している。

だからといって、九十年代もしくはそれ以前のアニメのように、食パンくわえて住宅街ダッシュ、てなことをやっているわけでもないけれど。

そもそも住宅街といえど都市部に近い自分の住まいから高校に向かおうとすると、すぐに大通りに出て人が溢れ返る。全力ダッシュを敢行すれば白い目で見られるかちよつと思春期特有の大人への反抗心をむき出しにしたオニチャン達に「急いでやがるな、じゃあちよつとこつち来てみようか？」とか声をかけられつつ、薄暗い路地裏に連れ込まれてしまうかどちらかだと思う。たまにそういう場面を見かける。台詞はおれの独断と偏見によるアフレコだけど。

と考えていると、

「だ、——っ、——すけ——っ……!!」

見えてしまった。

「……………」

自分と同じ高校の制服を着た気弱そうなちっこい男子生徒がオニチャン達に連行される現場を目撃してしまった。

彼なりに精一杯の悲鳴を上げたようだけど、か細いそれは雑踏に飲み込まれてしまって誰にも届いていなさそうだ。

……触らぬ神に祟りなし。良心がすこぶる痛むけど、周囲の会社員や同じような境遇の学生達に混じって早歩きでその場を去る。

……けど、このペースで間に合うか？

左手の腕時計に目をやる。朝礼が始まるまであと十分、普段のペースで歩けば二十分弱で高校につくけれど、それじゃ明らかに間に合わない。

早歩きをしたところで、ギリギリか遅れるか、微妙な所。

『心臓破り』と言われる、我が高校の校門前にある全長およそ五

十メートルの坂を全力疾走することになるかもしれない。そのあたりからだっただけ走ったところで変な目で見られることはないだろう。」

黙々と歩く。歩道橋の階段を一段飛ばしでのぼりおり、すれ違う自転車を避けつつ歩く。

燦々と降り注ぐ五月の太陽は、ぽかぽかとしていて気持ちがいい。街路樹の緑葉の間から差し込む様子もまたいいし、風も思ったより排気ガスで淀んでおらず澄んでいる。

三ヶ月前に引っ越してきたこの街は、結構気に入っている。少し歩けば便利な都会。

自宅周辺は少しにぎやかな住宅地。

都市部から少し遠ざかれば広めの自然公園もある。程良く都会で程良く田舎、そんな場所だ。

入学した高校にも、胸を高鳴らせる青春の香りがあつた。

これから楽しみに、始まったばかりの高校生活。

——だからこそ、アラームのかけ忘れとかいう、とんでもなくしょーもなくてどうでもいいミスで遅刻なんて悪目立ちしたくはない……！

少しだけペースを上げる。やがて校門が見えた。本鈴まで二分、おれのクラスがあるのは四階——走ればいける……！

歩きながら、脇に挟むように持っていた学校指定の硬い革の鞆を、リュックのように背負う。

まだ入学して間もなく、慣れておらず硬い革靴では少し痛むけれど、遅刻するよりはマシだろう。

ぐつと両脚に力を込め、肺に思い切り酸素を取り込み。百メートル走十四秒〇八の脚力を全開投入し。

駆け出——

「急ッいでやがるなア！ んじゃあちょーっとこっち来てみようかアアアッ！」

「ウボアー！？」

一歩踏み出したら何故か横の茂みから飛び出してきた女子生徒に、
鳩尾にフライングニーキックをかまされた。

ラスボスのやられ声のような声が出た！

おれの妄想アフレコの台詞よりいくらかエキセントリックな発音
と勢いを持ってやがる！

てかここ学校前だよな！　なんで見ず知らずの女子生徒にいきなり蹴り食らわせられなきゃいかんのか！　TPOって何だ知らんってか！

蹴りを受け、後ろ向きに倒れ、突然降り注いだ理不尽と激痛に呻く、しかしそんなおれに構わず、首根っこ掴んで茂みへと連行する女子生徒を見つつそんな脳内突っ込み（実際は息が止まってて本気で声が出ない）をしてやった。

いかーん、くらくらしてきた。倒れた時に頭打ったせいかな。
せめて、この怨敵の姿だけでも、と女子生徒をまじまじと観察する。

ぱっちりした目、すっと通った鼻梁、薄めの唇はきゅっと結ばれていて無表情。

学年を表すリボンタイがおれと同色の彼女は、有り体に言えば美人だった。

「これでいいのか？」

「うんバツチリ！」

連れ込まれた茂みには、二年生の女子生徒。サムズアップして屈託なく笑う先輩には、活発そうなイメージを抱くけど……。

何がバツチリなのかは知らないけど多分恐ろしく間違ってるよその方法は……と最後に考えて、おれの意識は一旦闇へと落ちることになる。

キレーな脚だったなあ――。

フライングニートキックで始まる波乱の生活が、始まった。

一章。

1

「で、こんなことがあったわけよ」

「うん僕には今そうやって平然と超奇天烈体験を話す君の神経が全く理解出来ないね」

昼休み。

机を付きあわせて、おれは友人である箕嶋優樹みのしま ゆきとランチタイムを過ごしていた。

クラスのマスコット（外見上）と呼ばれる優樹を初めて見た時は、飛び級してきた小学生か何かかと思った。それくらいの童顔。

かつ、顔立ちは整っている。カワイイ系男子というカテゴリで右に出る者は今のところ知らない。

そして、頭がいい。本当に。この間の学力診断テストの結果を見せてもらったけど、自分がミジンコの頭脳しか持ち合わせてないのだろうかと感じてしまつてすこし鬱になった。

そもそもこんなフツの高校でなく、全国区レベルの進学校に行くべきだったんだろう。

そんな女子人気の高い優樹は、まるでおれが度し難い変人のような言い方をした。おいおいそんなことないだろ。

「納得してないような顔だねえ……あのさ、普通初対面の女子生徒から蹴り食らつたって話自体ありえないよ……」

ちなみに、あの後目を覚ましたら保健室にいた。

養護教諭は「起きたの。戻るようだったら戻っていいけど、無理はしたら駄目よ？ いい？ほんとに無理したら駄目よ？」と、切迫した表情で何度も繰り返し、仕事があるけど、と本当に心配そうに保健室を出ていった。

なにやらとんでもない状態になって茂みに倒れていたおれを、誰かが保健室まで運んだのかもしれない。

本人達、ってことはなさそうだし。

「まあ、そうかも知れないけどな……」

それに、蹴りの威力が尋常じゃなかったしな。あの細身からどうやったらあんな威力が出るんだろう。

今は触りさえしなければ痛みなんてないけど、痣っぽくはなっている。

あれがもし頭とか、もしくは大事なアレとかにいつてたら……？

……………。

ぞつとした。

「最初はちゃんと悩んでたみたいなのに、途中から自分の腹見て悔しがったりさすってみたり青ざめたり、しまいには食事にも拘らず股間押さえるってどういうことさ。優莉、君、僕が言及したいところと見当違いの方向に爆走してないかい……？」

男のくせに、可愛い緑のけるけるけ。っぴの箸でタコさんウインナーをつまんでいる優樹が呆れ顔でこちらを見ている。

当たってるよ悪かったな天才けるけるけ。っぴ野郎！

っぴかタコさんウインナーで。

「んぐ、え、なに？　僕が言いたいことにようやく気付いたかい？」

「なあ優樹、お前って自炊だよな……」

「そうだよ？　男だからといって料理をしてはいけないという古風な考えは持っていないからね」

「そうかぁ……」

タコさんウインナーは趣味なのか……。

無駄に可愛いなあオイ！

いつそ女に生まれてれば良かったのに！

「で、優莉」

話を切り替えるように、優樹がおれの『名前』を呼ぶ。おれはそれに、

「久慈泉^{くじみ}という苗字で呼べと何度言えば……」

と、返した。優莉、という名前が、それこそ目の前のこいつもそうなんだけど、女のそれに聞こえてどこか嫌なのだ。

おれは男で、別に可愛くあろうという男の娘的な人種ではないつ。「いいじゃないか。ファーストネームでの呼び合いは親友に至る通過儀礼の第一歩だ。でだよ、君は本当に僕が言わんとしていることを理解していないのかい？」

「んー……」

優樹の声のトーンからして、本当に簡単なことを言っているらしかった。

となれば、おれは、

「おれが、そいつに何かした可能性があるってことか？」

「そゆこと。見覚えとかないのかい？」

「うーん……」

考える。

目鼻立ち整った、凜とした雰囲気美人。

おれは確かに青春したいと密かに思っていたりするけど、だからといって学年全ての女を把握しているわけでもないし、気になる人もいやしない。

どころか、今のところ自分のクラスメイトの顔と名前の一致率が五割を大きく下回っているような状態だ。

正直、今の今まで自分のことや目まぐるしく変わる周囲を把握するだけで精一杯だったからだという言い訳。

——結論。

「さっぱり分かん」

「……うーん、結構他人に無関心な優莉だし、こうなることは分かってたけれど……」

原因不明。

実際、おれには見に覚えがさっぱりないから、こうして困っているし、でもどうしようもないから悩んでいたって仕方ないと考えて

いるわけで。

……次に何かあった時には……どうにかする。

「なんとかなるさ」

「相変わらずの平和っぷりに僕は安心半分不安半分だよ……」

「いいじゃん、別におれはひ弱でもないし、なんかされそうになつたら抵抗するって」

「逃げなよ」

「男が女から逃げるわけにはいかん」

「その女の一撃で地に伏したのに？」

「……………不意打ちだって」

「気絶までしたのに？」

「……………たまたま頭打ったからだって」

「気絶するくらい勢い良く倒れるほど強かったんだよね、ニーキツク」

「……………次何かあったら全力で逃げます……………」

心配してくれているのだろうけど、優樹はたまにこうやってSっ気をちらつかせていじってくる。

なんとなく前を向いていられなくなつて、おれは自分の弁当を黙々と食べた。

ちらつと優樹の様子を伺ってみると、出来たてのじゃがバターみたくほくほくした表情でデザートのイチゴを頬張っていた。

§ 裏の林、苔生した岩の上にて

「……………なあ、あれは少しやり過ぎたんじゃなかるうか…………？」
私は不安だった。

一般人視点からおよそかけ離れた荒唐無稽さ、しかしながら見事なまでに快刀乱麻を断つこと、まさに至高の域。

一見、無謀に物事に突っ込んでいき、破滅以外の何かが見出せないような選択を繰り返し、何度も「これは終わった」と私に思わせ、しかし、その局面全てを上手い具合に回避若しくは解決してきた先輩のことだ、きっと大丈夫なのだろう——と、思いたいのはやまやまなのだが。

「だーいじょうぶよ、心配いらなくて！」

へらへらと笑って手を振る先輩——玖城依紗音先輩くじょう いさねは、どうも頼りない。

きつと、貴女のプランで私が受ける諸々の被害、何も考えていないのだ。何も。

「あの、私はただ、彼に恩を返したいだけなのだが」

「じゃあ普通にありがとう、って言えばいいんじゃないの？」

「そ、それだけというのも……足りない気がして」

彼には、恩がある。

ただ御礼の言葉を述べるだけ——そんなものでは足りない程のもの。

そもそも、彼がいなければ私は今頃ここにはいない。今ここにいるのも、この悩ましい逡巡も、彼のおかげなのだ。

きつと彼は自分がしたことの重大さに気付いていないし、そもそも、私の存在すら覚えてもないし気付いてもない。

私としては、別にそう急くことでもないと思っていたが、

「鉄は熱いうちに打とうよ！ ほら、早く早く！ つーかこれカンなんだけど、急いだほうが絶対いいよ！」

と、半ば強制的に。

ふと相談した依紗音先輩に手を引かれて歩き出す……いや、暴走する形で、今日の行動に出たのだ。

最初こそ、この人の言う通りのことをするのであればなんとかなるだろう、と高を括っていたが。

まず依紗音先輩のプランを聞き、二度聞き返してしまった。無茶という範疇ではない、絶対ありえない、好感を持たれるどころか確実に敵意を植え付ける。

私は何度も見直しを検討すると言及したが、一度目くらい騙されたと思ってやってみなよー、とゴリ押してくる依紗音先輩に――一週間同じ事を言っても、同じ言葉しか返ってこなかった――根負けしてしまい、いざ実行に移した、という按配だ。

「これって、普通に暴力事件じゃないか……」

「大丈夫！ 昨今の男の子たちがよく見る漫画やアニメって、唐突な巻き込まれ型が多いの！ そうなりや、いつちゃんがすごい変なキヤラになって、すごい唐突に襲撃してよかったの！ お礼がしたいんですよ！」

なにやら熱弁を振るう依紗音先輩。

「まあ、そうだが……二次元的なアプローチにしてもやり方が……」

「かあ——っ！」

分かってねーっ、分かってねーよ！ と、両手を額に当てて大仰に嘆く。

今の男子の趣味はよく分かる……というか私も結構好きだったりはそののだが……これは少し、間違ったかもしれない。

しかし、依紗音先輩は依紗音先輩なりに真剣だったのだらうと思う。

そう考えると、もう少し考えるべきだったのかと反省せざるを得ない。

ならばもう、勇氣はあまり出ないが、自分で考えて行動するしかない。依紗音先輩に迷惑を掛けるわけにもいかないので、苦手だが、そうすることにする。

「……依紗音先輩」

「なに！？」

こちらに背を向けて思い切り地団駄を踏んだり頭を抱えていたりしていた依紗音先輩が、こちらに勢い良く振り向く。眉間には皺が

寄っていて、その眼は私を睨めつけて離さない。

少々気圧されてしまったが、礼は言うべきものだ。ここまで協力を頼んでおいて、もういい、と言おうとしていることでさえ烏滸がましいというのに、その上これまでの礼もなしというのは、義理も何もあつたようなものではない。世の中にはそういった人が増えているようだが、少なくとも私は義理や人情を重んじる人間でいたい。「色々、考えてくれてありがとうございました」

「おっ……おう、そう素直に言われると照れるね……」

礼を言った瞬間きよとし、そして驚いたように少し頬を赤く染めて照れる依紗音先輩。ここまで表情の変化があるというのは、無表情で根暗な私にとって少し羨ましいこともある。

「で、どうしたの急にお礼なんて」

「いや——そろそろ、私も依紗音先輩に頼らないで自分でやってみるべきなのか、と思つて」

「え？」

依紗音先輩は、私の言葉を聞いて再びきよとしした。

しかしすぐに太陽のような笑みを浮かべて、

「も、もちろんいいよ！　うわあー、いつも私の後ろに隠れてついてきてたいっちゃんが、ついに自分でやるんだつて言つてる！

よーし！　依紗音お姉さん、精一杯応援するよっ！」

と、まるで我が子の成長のように喜んでくれた。その様子は、歳をとつてもなお天真爛漫さを失わない（私の両親談）依紗音先輩の母親にそっくりだ。

それに全ての運が味方をしているようなこの人の応援は、まるで守護の祈祷のようで、心強——

「——いっちゃんの恋路を！」

「！？」

何かしらの誤解が生じてる！？

「こ、恋なんて！　違いますよ、私はただ、」

「いーっていーって、恥ずかしがらなくつても。いやあ、いっちゃ

んもついに恋かあ……」

「だからっ、私はそんな……！」

私はただお礼がしたいだけで、そんな感情は持ち合わせていない！
そう反論を試みようとしたが、

「あ、予鈴だ」

「えっ！？」

次の授業、体育だった気がする……急がないと……！

「あたし次移動教室だから急ぐねーっ」

「ええっ！？」

依紗音先輩は既に校舎に向かって走っている。学校の裏の林は本来入ることはあまりよろしくないらしく、年季が入っているが、一応鉄製の柵がある。

行きは依紗音先輩と一緒にだったので通り抜けできる穴が開いているところから入ってきたものの、正確に場所をまだ覚えていない。

一人にされると、最悪柵を乗り越えなければならない。

「い、依紗音先輩は……」

しかし、

「ま、まずい……」

既にその姿はなかった。

「どうしよう……と、とにかく穴を探そう……」

2

電子チャイムが昼休みの終わりを告げる。

手早く弁当を片付けて、体操服を入れたサブバッグ（バック。つ丸ストラップ付き）を持った優樹がおれの机の所まで来た。

「優莉、着替えに行くよ。次って男子は確か体育館だし」

そっぴいばそうだった。

今回から、体育が男女別に分けられるという話を前回に担当教師から聞いていたような覚えがうつすら頭にある。なので、体育館で授業のある男子は体育館のある東校舎の更衣室で着替えることになっている。

ジェンダーフリーとは何だったのか！

「ほら、行くよ」

平坦な口調とは裏腹に、横に提げてあるサブバッグを掻っ攫って逃げるように教室を出ていく。

バッド。つ丸ついてないしおれのサブバッグじゃん！

「ああ！？ 待てよ優樹！」

空になった力。リーメイトの箱をゴミ箱に突っ込んで、優樹の後を追いかける。

横目に『廊下を走ってはいけません。風紀委員会』という張り紙があつたが、競歩の選手になれと言いたくなるくらい早歩きの手が尋常じゃない優樹に追いつくには走るしかない。

朝のような全速力ではないが、小走りで優樹の背中を追いかける。徐々に差は詰まるものの、なかなか追いつけない。

そして、

「どうして女の壁みたいなのができてるんだ……！」

音に聞こえしサン。オマニア箕嶋優樹様十五歳の可愛さが響き渡っているのは学年全体どころではないってことなのか！？

噂にある優樹様ファンクラブとかいう古風な存在すらも信憑性を帯びてきた。

とどころで進路の邪魔になっている女子の間を縫うようにして追いかけていると、優樹が何やら窓の外に目を向け、

「……………ふ」

策略家がえげつない作戦を思いついた時に浮かべそうな、気味の悪い微笑をおれに向けた。

「激しく嫌な予感がする……！」

思わず呟いてしまつて真横にいた生徒に妙な視線を寄せられた。

これも含めての孔明の罫やもしれん。

東校舎に行くための渡り廊下は一階。階段を降りていく十数メートル先の優樹は二弾飛ばしですぐ踊り場に辿り着いて、何故だか振りかぶった。

振りかぶったのは右手。

優樹のサブバッグは左手。

「そーれっ」

見事踊り場の高所に設置してある小さな明かり窓から外にダイブしていったのはおれのサブバッグ。

「おおおおおおい!？」

「手が滑っちゃったてへ」

「手が滑ってあの命中率なら今すぐバスケ部に入れ!」

現在シューター募集中らしいから手放しで喜ぶぞ!

バスケだけにな!

「審議するまでもなくくだらないよ優莉」

「心を読むな!」

ようやく追いついた優樹は悪びれていない。

しかし、おれのサブバッグがダイブしたこの明かり窓の向こうは

……

「大丈夫、ここの下って体育館の裏あたりだ。走れば間に合うだろう」

「そ、そうだけどさ」

それはすぐに見つかった場合の話だ。

もし鉄柵を越えて裏の林にでも入ってたらどうする!

「ほら、急いだ急いだ。僕は先に行ってるからね。間に合わなかったら……まあ、適当に言い訳しておくよ。迷惑はかけないから安心してくれ」

そう言っつて優樹は去っていく。

既に迷惑はかかっているんだけど、とは言えず、おれはすぐに優樹を追いついてサブバッグを探しに走った。

……すぐ見つかるといいなあ。

§

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0004w/>

（タイトル未定）

2011年8月25日03時27分発行